式亭三馬作『田舎芝居忠臣蔵』について
――『田舎芝居』の系譜――

吉丸雄哉

はじめに

文学作品には演劇をめぐる出来事や人物を紙上に写したものがある。天明七年刊の万象亭こと森島中良作の洒落本『田舎芝居』もその一つであり、越後国大沼郡妻有郷南鐙坂村で行われた旅芝居の九日目を描いている。『田舎芝居』は、芝居小屋に行く途中の若い男二人の会話の描写から始まり、次に芝居小屋の外側の様子、さらには芝居小屋の内側の様子と芝居にまつわる光景を、あたかも芝居見物に行くかのように、順を追って描写する。続いて、劇場内での観客たちの会話を描いた後、「豊年踊曾我田植」という曾我兄弟の対面の場を描き幕切れとなる。道中から木戸口へという展開は、江戸の遊里を舞台とする普通の洒落本の構成から離れたものではない。だが、『田舎芝居』は、田舎を舞台にし、田舎言葉での会話を中心に据え、旅芝居の行われた一日を滑稽に描き出したところに特徴がある。

『田舎芝居』が田舎を舞台にしたことは、『道中粋語録』の影響が指摘されている。(1) また、洒落本における田舎言葉の描出は『遊子方言』以来のことであり、万象亭自身も、国侍を描き、いろは別の方言の注解まで記した『真女意題』で田舎言葉の表現を取り入れている。しかし、『田舎芝居』では田舎言葉の表現について、より徹底している点で従来の洒落本とは一線が画される。『田舎芝居』には追従作が多く見られるが、それらを含め、「田舎芝居物」とよび、「田舎を舞台に、歌舞伎・人形浄瑠璃・談義等の催しが行われる様を描き、田舎の言葉の滑稽さや田舎者の滑稽な言動をあらわすことにおかしみを求めた作品」とひとまず定義する。(2)

式亭三馬にも「田舎芝居物」の著作が多少ある。本論文では、そのうち滑稽本『田舎芝居忠臣蔵』をとりあげる。『田舎芝居忠臣蔵』については(3)すでに重友毅、(4)本田康雄、(5)宮尾與男、(6)棚橋正博等によって考察されている。しかし、本論文では『田舎芝居忠臣蔵』が田舎芝居物の流れを汲む作品として、いかなる特色を備えるかを検討

し、そこから三馬滑稽本独自の特徴を見出すことを主眼とする。

一　田舎芝居物の系譜

まず、『田舎芝居』後の田舎芝居物の展開を確認しておく。『田舎芝居』後、もっとも早く作られた田舎芝居物は、葛飾金田村の法福寺での談義を描いた洒落本『田舎談義』（竹塚東子作、寛政二年刊）である。道中から始まるなど構成は『田舎芝居』の影響が強いものの、芝居を談義に置き換えたところに特徴がある。

『田舎談義』の次には、『田舎芝居』同様に芝居を扱った田舎芝居物である、滑稽本『田舎草紙』（十返舎一九作、文化元年刊）が続く。『田舎草紙』は中本五巻五冊全六十二丁半と『田舎芝居』の倍以上の分量を持ち、構成は『田舎芝居』を忠実になぞっているが、五巻中三巻を費やして忠臣蔵の七・九・十の三つの段を描いており、芝居の描写に丁数が費やされている。また、『田舎芝居』が金を払い旅芝居の興行を依頼する買芝居を描くのに対し、『田舎草紙』はその土地の素人が演じる地狂言を対象とすることが特徴である。格は落ちるとはいえ旅芝居の一座が演じる場合に比べ、素人芝居の方が常識の一線を超えた滑稽な出来事を舞台に起こしうるという効果があり、そのため芝居の描写を長く行うことが可能になったのであろう。『田舎草紙』からいくつかの趣向が、『道中膝栗毛』巻四上編に「田舎芝居の笑談」としてひきつがれていることが有名である。そこには地狂言の『義経千本桜』、買芝居の『菅原伝授手習鑑』の話を田舎者から弥次・喜多が聞くという形で、女形が疝気をおこすことや芝居と現実の区別がつかない闖入者が出るといった『田舎草紙』の趣向が再利用される。

『田舎草紙』後の田舎芝居物には、上方の旅役者が地方を廻る様を八文字屋本風の文体で描いた『田舎芝居　楽屋雑談』（七文舎鬼笑作、文化六年刊）、相撲を題材とした『勧善田舎相撲』（米花散人作、文化七年刊）、越後蒲原郡での旅芝居を歌舞伎の台帳に似せた体裁で記した『骨董新話　旅芝居田舎之正本』（万寿亭正二作、文化十一年刊）がある。これらは田舎での興行を扱っている点では、田舎芝居物とよべるが、会話文体を基調とした『田舎芝居』や『田舎草紙』といった作品とは趣きを異にする。

二　三馬の滑稽本と田舎芝居物

さて、三馬であるが、三馬は歌舞伎界の内情に通じ、また演劇的知識が豊富であった。『俳優楽屋通』（寛政十年刊）、『俳優三階興』（享和元年刊）、『戯場訓蒙図彙』（享和三年）などの純然たる演劇書の著述があることはその証左である。三馬は滑稽本の作者として有名であるが、滑稽本の題材として演劇を扱ったものも少なくない。最も早いものは、堺町と葺屋町という二つの芝居町の光景をはじめ、中村座の劇場内やそこにいる観客を描いた『戯場粋言幕の外』（文化三年刊）である。『戯場粋言幕の外』には田舎者の芝居見物という趣向が用いられている。これは、『両国栞』（明和八年刊）・『呼子鳥』（安永八年刊）・『真似山気登利』（安永九年刊）といった洒落本や、同様の手法を持つ滑稽本『旧観帖』（文化二年刊）の影響が

指摘されている。(7)『戯場粋言幕の外』は設定が江戸であり、またその芝居そのものは描写しないが、観劇の様子を描く点で『田舎芝居』と共通する部分もある。田舎を舞台とした滑稽本として『浪花土産初物語』（文化五年）があるが、これは江戸下りした中村歌右衛門の評判にあやかった一種の際物出版で、田舎芝居物ではない。

三馬の滑稽本のうち田舎芝居物とよべるものは、後述する『田舎芝居忠臣蔵』以外には、門人楽亭馬笑と合作した『狂言田舎操』（文化八年刊）がある。これは浄瑠璃の買芝居を題材とし、浄瑠璃太夫でもあった合作者馬笑の知識が存分に生かされた作品である。ただし、『狂言田舎操』は田舎を舞台とした田舎芝居物であるが、買芝居のため、登場人物は上方か江戸の言葉を使う者が多く、田舎言葉や田舎者の言動が中心に据えられてるとは言いがたい。上方者の浄瑠璃語り旅本旅籠太夫との江戸者の人形遣いでく蔵との間で、上方言葉と江戸言葉の優越論が交わされるといった『浮世風呂』にも見られる趣向が上巻の大部分を占めることが好例といえる。(8)

『狂言田舎操』と同年には芝居見物客を役者評判記の体裁で描いた『客者評判記』（文化八年刊）が刊行され、その後、『忠臣蔵偏癡気論』（文化九年刊）や『蔵意抄』（文化十年刊）といった忠臣蔵にちなんだ滑稽本が執筆されたのち、田舎芝居物の滑稽本『田舎芝居忠臣蔵』が刊行される。

三　『田舎芝居忠臣蔵』初編と夢羅久の落話

『田舎芝居忠臣蔵』初編（二巻二冊、文化十年、鶴屋金助刊、文化八年十二月上旬序、同年同月十三日跋）、二編（二巻二冊、文化十一年、鶴屋金助刊、文化十年五月上旬脱稿）は地狂言の忠臣蔵を題材にした田舎芝居物である。

執筆の経緯は序文に記されるが、その要約は次のとおりである。落話の達人朝寝房夢羅久は落話を上梓しようとしたが下書きの暇がなかった。そこで、三馬のもとをたずね、つねづね演じる「鼾勾欄話」の忠臣蔵第三回の一齣を記した小冊子を渡し、今のままでは文拙く趣向が短いといって三馬に増補を頼んだ。また第四回から第十一回目まで引き継ぐことを勧めた。田舎芝居の作品は多いがすべて万象亭の糟粕を嘗めるだけであり、夢羅久の小冊子もその一つであり、たとえ続編を書いても苦労はするが功はないという意見を三馬は述べたが、夢羅久が承知しなかったので、増補して版元の鶴屋金助に渡した。

滑稽本への落話の利用は、三笑亭可楽の落話をもととした『浮世風呂』が有名である。『浮世風呂』と同様に『田舎芝居忠臣蔵』も落話の利用が行われたといえる。ただし、夢羅久が三馬に渡した小冊子は現存しない。よって、その内容は推測するしかない。

『田舎芝居忠臣蔵』は、寺での寄り合いへの道中から始まり、寄合で忠臣蔵の上演が決まるところから、役決めまでが初編の上巻にあたる。初編の下巻では語りをつとめる竹本茶飯太夫の来歴からはじまり、三味線を弾く亀沢三味八と在所の人物たちの会話から稽古の場面、そして忠臣蔵三段目の場面までが描かれる。序文にあるように、夢羅久が渡した小冊子は忠臣蔵第三回の一齣であることと、ま

た初編・二編それぞれの署名について、初編では「江戸　式亭三馬新編　朝寝房旧案」されるが、二編では単に「江戸戯作者　式亭三馬戯編」とされることから、夢羅久の落話の利用は初編までとみてよい。

では、夢羅久の落話が利用されたのは、初編のうち具体的にはどの部分にあたるのか。初編上巻には、玄十・鉄蔵・厩介の三人がお軽を希望し争い、結局三人ともお軽となるという箇所がある。これは落語の「権助芝居」や「蛙茶番」のまくらの小話と同種のものである。[9] 落語での役揉めの起源は明確ではないものの、落語になじみやすいネタとして、夢羅久の落話に既に含まれていた可能性は十分にある。

では、三馬の増補はどこに見られるのか。初編下巻には竹本茶飯太夫と亀沢三味八という旅廻りをする太夫と三味線弾きが登場するが、これは『狂言田舎操』の旅本旅籠太夫とでく蔵と類似のもので、三味八がする綯い交ぜのでたらめな芝居の話や、故人も含めた江戸や大坂の太夫の話は『狂言田舎操』にもみられるものである。また、初編下巻には竹本茶飯太夫が旅芝居の一座で隠語で苦しんだことが描かれるが、隠語は『戯場粋言幕の外』で多用された趣向である。このように、知識に依存した部分は三馬が増補した箇所だと思われる。[10]

他に、増補されたとみなされるのは「田舎芝居物」に類型的だが、忠臣蔵三段目を表現するには関係のない場面である。初編上巻の冒頭には、寺での寄合に行く玄十と談義を聴きに行く老婆と後家の会話や、玄十と寄合に行く鉄蔵との世間話といった導入に当たる部分が描かれる。これは『田舎芝居』をはじめ田舎芝居物によくみられる趣向だが、忠臣蔵三段目には関係がない。また、田舎芝居の芝居小屋の内外を描くことや、劇場内での配役の口上といった田舎芝居物で類型的な内容も、忠臣蔵第三段目を表現するためには必ずしも必要ではない。以上のように、演劇的知識に依拠した部分、及び忠臣蔵三段目には直接関係ないが田舎芝居物では類型的な場面を描いたところに三馬の特徴がある。

四　『田舎芝居忠臣蔵』二編と『田舎芝居』

夢羅久の落話のあとをうけ、三馬が執筆したのが二編である。初編の末尾には、続編に四段目と五段目を収めることが予告される。だが、実際の二編では上巻及び下巻の途中まで見物客の会話をとりあげ、残りに四段目が当てられている。この二編の特徴は『田舎芝居』を原拠とする箇所が多いことである。

単なる田舎芝居物としての漠然とした類似ではなく、詞章の流用まで明らかに認められる部分が数多く存在する。上巻では、「くろ助が語る幕の由来（7丁裏）」「おなすと五作についての話を聞いた茂三郎の嫉妬（8丁裏～10丁表）」「陀羅助と孫太郎の場所の取り合い（10丁表～14丁裏）」「口上　役者への贈り物の読み上げ（15丁裏～18丁表）」「土桟敷にいる江戸者の商人による、地方の伝統のある芝居の話（19丁表～25丁表）」「上桟敷の和尚の幕営め」（25丁裏）が該当する。下巻では「役者に贈り物をしたおなすを恋人の五作が責める

（8丁裏～12丁裏）」「観客二人が舞台に上がって誉め言葉をいう（18丁表～19丁表）」が該当する。すべてを検討する余裕がないのでそのうち二つを例にあげて確認する。

まず、『田舎芝居』三立目「又六と孫作の場所の取り合い」と『田舎芝居忠臣蔵』二編上巻「陀羅助と孫太郎の場所の取り合い」を比較してみる。

『田舎芝居』三立目　場所取りの争い（又六・孫作）

［孫作］　亦六殿、わり様も地面の見て物なァ云なさろ。大飯振舞の座席たァ違い申す。遊所で席論なァ入申さない。先へ這入ッたものがさきに居べき筈でござらァよ。こかァ悪所でござりもす。

［又六］　ハテあく所も灰小屋も入申さない。

のに対し

『田舎芝居忠臣蔵』「陀羅助と孫太郎の場所の取り合い」

［たら］　孫太どの。主もはあ、場所を見てものをいはっしやい。大飯振舞の座席たァ違ふべいぞ。遊所で座論な入り申さねへ。先へ這入たものが先に居べきはずでござらァ。こかァ悪所でござり申す。

［孫］　ハテ悪所も魔所もいらねへこんだ。

と細部まで詞章の類似が認められる。

また『田舎芝居』四立目「代官が語る地方の芝居」と『田舎芝居忠臣蔵』二編上巻「江戸者の商人による、地方の伝統のある芝居の話」を比較すると、『田舎芝居』四立目では

［代官］　拙者も若い時分は至て放蕩で、所々方々遍歴致して、旅芝居も見物致したが、銚子の浦方の芝居では、何の狂言でも、大切に張子の赤鬼を出さねば見物が立ませぬ。仙台の釈迦堂などの芝居は、見廻りの役人が参ると、楽屋から居合抜の形に拵た役者が出て、やつとふ〳〵のしなへ打と申て、居合をぬく真似をするので、薬売の体になります。

に対し、『田舎芝居忠臣蔵』二編上巻「江戸者の商人による、地方の伝統のある芝居の話」では

［江戸者の旅商人］　上総の東金近辺、外房州のあたりでは何の狂言をしても、大切に張紙の赤鬼を出さねは見物が承知しねへね。夫だから終際になると、鬼を出せ〳〵と見物がやつぺし鳴喚くだ。［中略］奥筋では南部の芝居も能芝居さ。これも見廻りの改人が来ると楽屋から居合抜の形に拵た役者が出て、ヤットウのしなへ打と号して、居合をぬくまねをするので薬売の体になり申す。

とあり、これまた字句および内容の類似が明確に認められる。田舎芝居物の作品は多かれ少なかれ『田舎芝居』の影響が見受けられるが、『田舎談義』や『田舎草紙』よりも、『田舎芝居忠臣蔵』はその影響が甚だしい。三馬は骨子となる趣向を『田舎芝居』から得て、詞章まで流用する形で、『田舎芝居忠臣蔵』を書いたのだが、「場所取りの争い」では先に引用した部分に悪口の台詞を追加し、「地方の伝統ある芝居の話」では『田舎芝居』の例の他に七箇所の土地の芝居を説明させるなど、台詞を付け足すやり方で、全体の分量を多く

している。このようなやり方が三馬の流用方法の特徴であり、結果として、『田舎芝居』は本文が三十七丁半であるのに対し、『田舎芝居忠臣蔵』は二編だけで本文が七十八丁となっている。

五　三馬の特色

このように『田舎芝居』の利用は『田舎芝居忠臣蔵』の大きな特徴であるが、『田舎芝居忠臣蔵』は『田舎芝居』に限らず、田舎芝居物に典型的な趣向を多く用いている。「田舎芝居物に典型的な趣向」とは、特定の作品を原拠と断定することはできないが、田舎芝居物にはよくみられる趣向のことである。さらに「田舎芝居物に典型的な趣向」も、「演劇種の作品と共通する趣向」と「田舎芝居物特有の趣向」の二つに分けられる。「演劇種の作品と共通する趣向」とは田舎芝居物ではなくとも、例えば『戯場粋言幕の外』のように、芝居を題材とすればよくみられる趣向のことである。『田舎芝居忠臣蔵』初編下巻には物売りや出店をはじめ芝居小屋の内外の様子が描かれ、二編上巻の冒頭には土桟敷の様子が描かれている。このように劇場内外を描くことや、以前例にあげた観客同士の場所の取り合いは「演劇種の作品と共通する趣向」といえる。「田舎芝居物特有の趣向」とは、『田舎芝居忠臣蔵』二編下巻の「観客二人が舞台に上がって誉め言葉をいう」場面などの田舎芝居の慣習に依拠したものや、田舎言葉の使用や田舎者の無知をあらわすといった田舎ならではの趣向が該当する。『田舎芝居忠臣蔵』は「演劇種の作品と共通する趣向」と「田舎芝居物特有の趣向」の両方を積極的に取り入れた、田舎芝居物としてはきわめて典型的な作品であったといえる。

以上のように『田舎芝居忠臣蔵』は田舎芝居物の型をふんだんに取り入れた作品だが、それでも三馬独自の特徴を見出すことができる。まず、あげられるのは本筋とは関係のない挿話が多いということである。先述の「江戸者の旅商人がする地方の伝統ある芝居の話（七丁分）」や二編上巻の「忠臣蔵の登場人物が仏法に触れていることを和尚が説くこと（五丁分）」や二編下巻の「八木内という寺の飯炊き男の説法（八丁分）」といったものは、丁数が割かれているにもかかわらず芝居の進行という本筋とは関係がない。

また、初編での竹本茶飯太夫と亀沢三味八の会話も該当するが、江戸者の旅商人が使う言葉は江戸語であり、和尚や八木内の説法も田舎言葉ではない。このように『田舎芝居忠臣蔵』は田舎芝居でありながら、田舎芝居物の特色の一つである田舎言葉の使用を差し控える場面が多くみられる。このことは、三馬のもう一つの田舎芝居物である『狂言田舎操』にもあてはまる。

『狂言田舎操』には、「（三馬は）臆病者だから田舎などへ出たことはなし。江の島鎌倉へ遊山に往たばかり、其外は下総辺に知己があつて折ふしに旅行もあつたれど、三馬において旅大きらひさ」と三馬の旅嫌いが記されている。これは、三馬の伝記史料からしてもほぼ正しいことといえよう。[11] 九州から奥州までをくまなく旅し、そういった実地の体験をもとに『田舎芝居』を書き上げた森島中良と、旅嫌いの三馬とは、同じ田舎芝居物の作者とはいえ対照的である。[12]

三馬は乏しい旅行経験の中で、文化三年に下総潮来の地を訪れた

体験を元に、江戸者二人の潮来での遊興を描いた洒落本『潮来婦志』を書き上げている。三馬は作中に凡例をもうけ江戸の言葉と潮来の言葉を比較しているが、「地理疎く人情通ぜざれば。風土の方言。娼門の規矩。齟齬錯雑多く。杜撰甚きを恥て広く世に布く事をゆるさず」として、三馬生前には『潮来婦志』は刊行されていない。

実際のところ、三馬はある土地の田舎言葉に通じていたわけではなく、奉公人など地方から江戸へ来た人々を通じて田舎言葉の知識を得ていたと思われる。『田舎芝居忠臣蔵』に舞台となる土地が明記されていないことはその証しとなる。よって、『浮世風呂』や『浮世床』あるいは『潮来婦志』のように江戸語の会話の中に田舎者と田舎言葉をさしはさむことはできても、田舎言葉のみで作品を構成するのは難しかったのではないか。

『田舎芝居忠臣蔵』の他の特徴として、素人狂言の描出があげられる。序文の余白に記された注には「こゝに差別をいはん、万象亭著作の田舎芝居は、旅役者の狂言なり、此書は田舎の地狂言なり、頗異躰」とあり、『田舎芝居』が買芝居を描いたのとは異なり、地狂言を扱ったことを強調している。地狂言を扱うことは、『田舎草紙』に既にみられる。『田舎草紙』の特徴である、素人芝居によって常識の一線を超えた滑稽な出来事を作中に起こしうるという効果は『田舎芝居忠臣蔵』にもあてはまる。ただし、夢羅久の落話の影響もあってか、稽古風景に丁数を増やしていることが『田舎草紙』との差異となる。『田舎芝居忠臣蔵』初編（文化八年十二月上旬脱稿）と二編（文化十年五月上旬脱稿）の間に『素人狂言紋切形』（文化九年四月下浣序。文化十一年刊）が執筆されている。『素人狂言紋切形』はチャリ仕立の座敷狂言を好み寝食を忘れてそれに興じる人々を描いた作品である。田舎と江戸、芝居の素人と玄人という違いはあるが、『素人狂言紋切形』には稽古の場面も含まれ、『田舎芝居忠臣蔵』の影響が認められる。

『田舎芝居忠臣蔵』と同時期の三馬滑稽本との関係は他の作品にも認められる。『田舎芝居忠臣蔵』は『田舎芝居』や『田舎草紙』に比べ、芝居の展開がやや遅く、芝居の場面を描くことよりも、客観の描写や本筋とは関係のない挿話を重視している。これは、滑稽な趣向を劇中に生み出すことよりも、話をはめ込んでいくことが、三馬にとってやりやすかったからではないか。話のはめ込みという手法は同時期の『浮世床』初編（文化八年五月十日序。文化十年正月刊）二編（文化九年十二月中旬序。文化十一年正月刊行）や『浮世風呂』第四編（文化十年正月刊）に認められるものである。[13]

また、『田舎芝居忠臣蔵』二編の最後は、喧嘩の仲裁が入って和睦の酒宴となり、肴が出るがそれはうどんで、ちょうど舞台で判官が切腹し、判官しっぽくというオチがつく。これは、芝居を行い最後にそれに関係した景物を出すという茶番のやりかたと同じオチのつけかたである（ただし、当初から茶番として扱われているわけではない）。三馬は文政四年に『茶番早合点』という実例つきの茶番の解説書の出版もしているが、そういった茶番の趣向を持ち込むことは、三馬の茶番への関心の深さがうかがわれるところである。

まとめ

『田舎芝居忠臣蔵』は田舎芝居物の伝統をうけついだ滑稽本であり、初編は夢羅久の落話、二編は『田舎芝居』を積極的に利用することで成り立っている。しかし、田舎言葉を全面におしだした田舎芝居物は、田舎言葉に精通していなかった三馬にとって決して書きやすいものではなく、田舎言葉ではない話を多くさしはさんでいるという面もみられる。話をさしはさむことで作品を構成する手法は、『浮世床』といった三馬の同時期の滑稽本にも認められる。また、『素人狂言紋切形』のような素人狂言を扱った滑稽本や茶番とのつながりも注目される。

予告にもかかわらず、『田舎芝居忠臣蔵』の第三編は刊行されなかった。それには二つの理由が考えられる。田舎芝居物の流行は地方における田舎芝居の隆盛を反映しており、文化十一年の『旅芝居田舎之正本』と『田舎芝居忠臣蔵』二編以降、田舎芝居物の作品が認められないのは、文化二年の関東取締役の設置以来、地狂言が制限されるようになったためと思われる。(14)

もう一つの理由は『田舎芝居忠臣蔵』の不人気であろう。『浮世風呂』『浮世床』といった三馬の他の滑稽本では、江戸にやってきたよそ者たちは江戸の秩序・価値基準の中で滑稽な存在として描かれる。もちろん、舞台が江戸でなく、田舎者との価値の差別づけをしてくれる江戸者が登場人物に皆無でも、読者が江戸の人であれば、読者自身の江戸の秩序・価値基準から、田舎言葉・田舎者の言動を滑稽だと感じることはできるだろう。「田舎芝居物」の滑稽さはそこに保証される。しかし、洒落本・滑稽本の中で、田舎を舞台にし、田舎者のみで構成される場面を読む場合、作品中で田舎言葉と江戸語、田舎者と江戸者の対比がなされなければ、滑稽味は薄まる。三馬が、『田舎芝居忠臣蔵』や『狂言田舎操』で、田舎言葉が使用される割合を減らし、田舎者以外の登場人物を多く出したそのためであろうが、それでも『浮世風呂』『浮世床』より滑稽味は劣る。また、他の田舎芝居物と比べても、一地方の事実を伝える書として読む余地もない『田舎芝居忠臣蔵』の不人気は必然の結果だった

『田舎芝居忠臣蔵』の執筆に三馬が消極的であったことは序文によってわかるが、それは単に二番煎じだからではなく、三馬自身が江戸の言葉で江戸の日常生活を描くことこそ本領であったことを自覚していたからではなかったか。逆説的な意味合いで『田舎芝居忠臣蔵』は三馬の特徴をよくあらわした作品だといえよう。

注

(1) 本田康雄「『田舎芝居』について―洒落本研究ノート―」(『金沢大学法文学部論集・文学篇』8、昭和36・1)。

(2) 「田舎芝居」という言葉は都会人が田舎を笑うという感覚が潜むとして、演劇学・民族学では現在「田舎芝居」より「村芝居」が一般的である。しかし、本論文では「田舎芝居物」の戯作が『田舎芝居』の影響を受けたものとして、また、まさに都会人が田舎を笑うという感覚が潜むものとして、「田舎芝居(物)」「田舎言葉」の名称を用いた。

(3) 重友毅「三馬の滑稽本」(『近世文学論集』文理書院、昭和47・9、

329〜330頁。初出は『近世文学考説』積文館、昭和8・8)。

(4) 本田康雄『式亭三馬の文芸』(笠間書院、昭和48、301〜303頁)。

(5) 宮尾與男「三馬滑稽本の成立(上)—『田舎芝居忠臣蔵』を中心に—」(「語文」45、昭和53・9。下は未刊)。

(6) 棚橋正博『式亭三馬』(ぺりかん社、平成6・11、243頁)。

(7) 注4の本田前掲書、118頁。

(8) 『浮世風呂』二編巻之上の上方女や四編巻之中の「上方下りの男」の場面など。

(9) 興津要編『古典落語』(下)(講談社、昭和47・7)所収の「権助芝居」および同編『古典落語』(続)(講談社、昭和47・12)所収の「蛙茶番」を参照のこと。

(10) 注5の宮尾論文では、政太夫や住太夫については三馬の増補とみなすが、夢羅久との関係のある豊竹宮戸太夫については、夢羅久の落話にあったものとみなす。本論文では落話の興を呼ぶものではないという理由で、宮戸太夫についても三馬の増補とみなした。

(11) 三馬が箱根より西に旅しなかったことは中村幸彦「近世語彙の資料について」(「国語学」87、昭和46・12)で夙に指摘されている。また、三馬の事績について詳細な棚橋前掲書にいたるまで、三馬が下総以外に遠方へ旅行したことを示す資料は報告されていない。

(12) 東条操「洒落本に現れたる方言の考察」(『近世文学の研究』至文堂、昭和11)では、万象亭の洒落本『真女意題』の国詞の大部分が仙台方言として信ずるに足るとする。一方、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃の正確でないことが、小島瓔礼「浮世風呂の仙台浄瑠璃」(「近世文学会会報」3、昭和44・4)で、また、三馬の上方語の知識が正確でないことが、五所美子「式亭三馬の言語描写についての一考察」(「語文研究」26、昭和44・10、のち『近世語』鈴木丹士郎編、有精堂出版、昭和60・4に所収)や土屋信一「『浮世風呂』の上方者の言葉」(「香川学園国文研究」14、平成元・9)で指摘される。

(13) 本田康雄『浮世風呂・浮世床—世間話の文学』(平凡社、平成6・4、136〜138頁、170〜175頁)は、『浮世風呂』前編から『浮世床』二編までの作風の変化を検討し、浮世物真似の文芸化から様々な趣向の話をはめ込むことへの重点が移ったことを指摘する。

(14) 守屋毅『村芝居—近世文化史の裾野から』(平凡社、昭和63・7、79〜85頁)が村芝居への禁令と弾圧を指摘する。

(よしまる　かつや／東京大学人文社会系大学院博士課程)